

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第169号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成24年9月21日

カワウ



2012. 4. 12 石狩市八幡石狩川河口付近

撮影者 樋口孝城（札幌市北区）



も く じ

ケリ観察記 (浜頓別町)	札幌市北区 辻 雅司	2
日本雁を保護する会の活動と今後の課題		
	日本雁を保護する会 佐場野 裕	3
札幌市北区篠路にカナダヅル		6
ハシグロアビの記録 (稚内市抜海港)	留萌市 佐藤 圭	7
【閑話】 野鳥あれこれ 日本鳥類目録の改訂		7
双眼鏡をちょこっと置いて	札幌市白石区 浜野チエ子	8
置戸町・鹿ノ子ダムでチョウゲンボウを観察		
	NPO法人EnVision環境保全事務所 中森 達	9
野付半島のワタリガラス	標津郡中標津町 中田千佳夫	10
来年の年賀状	当別町 道川富美子	12
探鳥会 ほうこく		13
探鳥会 あんない		16
鳥民だより		16

ケリ観察記 (浜頓別町)

札幌市北区 辻 雅司

今年(2012年)5月の連休に道北方面へ旅行しました。2日の昼過ぎ、浜頓別町クッチャロ湖での観察を終え、稚内市へ移動する前に兜沼へ立ち寄ることにし、クッチャロ湖の小沼と隣接するボン沼との間の間道を抜けることにしました。オホーツク海側から間道に入った左手には放牧地の丘陵が広がっています。間道に入って直ぐの放牧地に数羽の大型の鷺がたたずんでおり、双眼鏡で確認するとオオワシとオジロワシのようです。そこで車を止め、スコープで観察することにしました。スコープの準備をしていますと、妻が100m以上離れた作業小屋の近くでカラスにモビングされている鳥に気がつきました(妻の目撃談:鳴き声が鋭く、けっこう大型で、翼の先端が黒いのが目立った)。午後1時半頃のことでした。双眼鏡で確認すると、中型のシギのようですが、色合がちょっと変。早速スコープで確

認しますと、見たことがない鳥でしたが、なぜか「ひょっとしてケリ」と頭に浮かびました。図鑑で確認するとドンピシャ。富士鷹なすび画伯による「原色非実用野鳥おもしろ図鑑」による日頃の研鑽のたまものと思います。妻が「証拠写真!」と叫びます。私のカメラは焦点距離が300mmで、100m先のケリを写すには実力不足です。慎重に少しずつ近づき、これ以上進むと放牧地の電気柵で感電するところまで近づきました。ケリまでの距離は50m以上あったかと思っています。写真のケリは、撮ったボケボケの大量の写真の中でいくらかましな2枚です。図鑑にはケリは気の強い鳥と書いてありますが、何かの間違いで道北まではるばる来てしまい、気弱になったのでしょうか、カラスに追い立てられ、飛び去っていきました。



地上に降りたケリ



飛び立ったケリ

日本雁を保護する会の活動と今後の課題

日本雁を保護する会 佐場野 裕

夏の暑さのピークも過ぎて秋の気配が感じられる9月になると、サロベツ原野や十勝川下流域からガン類の飛来の知らせが届き始めます。その後、ガン類の群れは、次第に南下し宮島沼、ウトナイ湖などの中継地を経由して本州に渡り、秋田県の八郎潟・小友沼、宮城県の伊豆沼・蕪栗沼、新潟県の福島潟・朝日池など各地の湖沼に分散して冬を過ごします。

現在、日本に渡ってくるガン類の総数はおよそ20万羽ほどですが、その中でマガンの数が最も多く、総羽数のほとんどを占めています。次に多いのはヒシクイです。日本に飛来するヒシクイには、二つの亜種・ヒシクイとオオヒシクイがありますが、両方の亜種を合わせて約1万羽のヒシクイが日本に飛来しています。その他、数の多少は別にして、近年、定期的に飛来するガン類としては、コクガン、シジュウカラガン、ハクガン、カリガネが含まれます。コクガンは秋期に道東部の沿岸域で最大8000羽ほどが姿を現します。このうち2-3000羽は、函館湾、むつ湾、三陸沿岸などで越冬が確認されていますが、その他はどこで越冬しているかは不明です。

冬の渡り鳥であるガン類は、その凛々しい姿はもとより、カギやサオとなって空を行く雁行の美しさ、風情ある鳴き声、また仲間どうしの絆の強さなどから、古くから愛好されている鳥のひとつです。そして、今日でも、ガンの渡ってくる水辺では多くの野鳥ファンがその渡来を心待ちにし、飛来後は、その羽数を数えたり、カメラに収めたりして短いガンのシーズンを楽しんでいます。

日本のガン類消滅の危機

現在は、秋から冬の風物詩として定着しているガンの渡来ですが、実は、今から40年ほど前には、全国からガン類の渡りが途絶えてしまいそうな危機的状況にありました。図1は、年ごとにガンの飛来数がどのように変わってきたのかを示すグラフです。1940、1950、1960年代の色の薄い棒は、全国からのガン類の飛来数についての聞き取り調査の集計です。1970年以降は、伊豆沼・蕪栗沼などを含む宮城県北部で越冬するマガンの数です。全国に飛来するマガンの80%以上が宮城県で越冬しているので、この数で日本に飛来するガン類の動向をみることにします。

現在、ガン類の渡来が見られるのは、水辺の豊かな環境が残されているごく限られた地域のみですが、60年ほど前までは、ガン類は、九州から北海道までの全国で普通に見られた野鳥のひとつであったことが、聞き取り調査や狩猟の記録などからわかります。ところが、その後、60年から70年代にかけて、この国がとった高度経済成長政策のもとで全国の工業化が進み、各地の湿地や水田は次々に失われていきました。それに伴い、ガンの姿も全国から消えていき、1970年代初頭には、ガン類の越冬総数は5千羽にも満たないほどに減少してしまいました。当時は、マガンとヒシクイが狩猟鳥であったため、猟銃でねらわれたことも減少に拍車をかける結果となりました。

日本雁を保護する会は、1970年9月に、当時、国内有数のガン類飛来地であった宮城県仙台市福田町でのガン類の密猟防止の活動を契機に「福田町の雁を保護する会」と

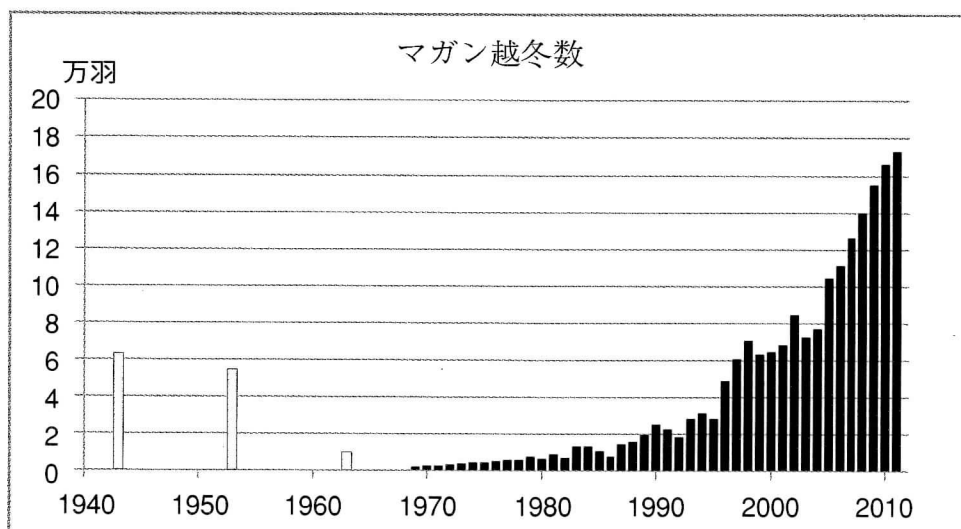


図1. マガン渡来数の経年変化。1940、1950、1960年代の色のうすい棒は、全国からのガン類の飛来数についての聞き取り調査の集計。1970年以降は、伊豆沼・蕪栗沼などを含む宮城県北部で越冬するマガンの数。

して発会しました。しかし、残念なことに福田町からは、バイパス道路とその関連工事の影響も加わり、ガン類の姿は消滅してしまいました。その後、「雁を保護する会」と改名しガン類の全国禁猟を要望する署名運動を展開し、世論に訴えながら「マガン、ヒシクイの狩猟禁止と天然記念物指定」を政府に陳情し、1971年にガン類の法的保護の実現にこぎつけました。その後は、図1に見られるように、マガンの数はゆるやかな増加に転じ、日本からのガン類の消滅は、ぎりぎりのところで回避されました。



写真1. 宮城県の蕪栗沼周辺の田んぼで採食するマガンの群れ 2010. 12. 19 撮影：上村左知子

日本に飛来するガン類の故郷

日本に飛来するガン類は、北方の繁殖地と越冬地である日本とを、国境を越えて数千km以上の距離を移動する渡り鳥です。

このような渡り鳥を保護していくためには、繁殖地と越冬地、さらに途中に立ち寄る中継地のすべてが良好な状態に保たれていなければなりません。会の発足した1970年代には、日本にやってくるガン類がどこで繁殖をしているのか、どのようなルートをとって飛来しているのかはほとんど未解明な状態でした。そこで、1980年代には、当時のソ連（現在はロシア）科学アカデミーと共同で、標識調査を開始しました。日本からロシアに送った首環標識を、ロシアの研究者が換羽のために飛べなくなる時期に捕獲したガンに装着して放鳥してもらい、日本では冬季に渡ってくるガンの中から首環を付けたガン類を探し、標識を読み取るという調査です。1990年代になり、ソ連がロシアに変わって日本からロシアへの渡航が比較的容易になったことで、1991年からは日ソ共同の繁殖地での調査活動も行われるようになりました。その結果、日本へ渡来しているヒシクイの2亜種（ヒシクイ、オオヒシクイ）はカムチャッカ半島から飛来していることがわかりました。

1991年以降は、北東ロシアのチュコト半島にあるマガンの繁殖地でも日ソ共同の調査が行われるようになり、また、人工衛星用送信機も用いられるようになりました。

1993年には、人工衛星用送信機のガン類への装着で実績のある米国の研究者と共同で、宮城県伊豆沼で捕獲したマガン10羽に人工衛星用送信機を装着し、日本に飛来しているマガンの渡りの経路とチュコト半島南部が繁殖地域であることを解明することができました。

このように、会の活動が国際的になってきたなかで、1991年には、会の名称は現在の「日本雁を保護する会」と改称されています。

ロシアのガン類研究者との共同作業が行われるに伴い、日本に渡ってくるガン類の故郷となるロシア国内においても、ガン類の保護区の設定や狩猟の制限などの保護対策が講じられるようになりました。このような背景も、図1にみられる1990年代以降のマガンの数の顕著な増大の要因のひとつになっていると考えられます。

稀少ガン類の羽数回復

さて、1970年代始めにあった日本からのガン類消滅の危機は回避され、マガンの数が増加に転じて順調に増大していることは喜ばしい限りなのですが、これで日本のガン類についての問題がすべて解消したということではありません。残された大きな課題が二つあります。そのひとつが、1970年代以前にすでにほとんど絶滅状態になってしまい、稀にしか見ることができなくなっている希少種の問題です。江戸時代や明治時代のガン類についての古い記録によれば、現在は希少種となっているシジュウカラガン、ハクガン、サカツラガン、カリガネは、かつては、毎年定期的にまとまった集団として飛来するごく普通の渡り鳥でした。

シジュウカラガンは、かつては千島列島とアリューシャン列島の島々で多数繁殖し、日本と米国西海岸で越冬していました。ところが、20世紀の初めの世界的な毛皮ブームを背景に、毛皮目的で千島やアリューシャンの島々に多数のキツネが放されるようになり、そのためにシジュウカラガンはキツネのえじきとなり絶滅したとされていました。しかし、1963年に、絶滅したとされていたシジュウカラガンの小群が、アリューシャンのバルディール島で奇跡的に発見されました。米国政府はシジュウカラガン羽数回復計画チームを作り、30年を超える努力の結果、1999年には米国の群れは3万羽を超えるほどになり、絶滅の危機を脱することができました。

わが国では、1983年、仙台市八木山動物公園と雁を保護する会とで組織された「仙台ガン研究会」により、米国の研究者の協力を得ながら、羽数回復計画が開始されました。その後、ロシアの研究者も計画に加わることとなり、日ロ米の国際共同計画として努力が重ねられてきています。1992年には、カムチャッカにロシア科学アカデミーの繁殖用施設が完成し、シジュウカラガンの親鳥が米国と八木山動物公園から運ばれました。1995年には、かつての繁殖地である千島のエカルマ島での放鳥が開始され、計画の最

後の放鳥となった2010年まで、のべ551羽が放たれました。しばらくは成果があがりませんでした。2005/2006年の冬には、11羽の放鳥個体が日本へ飛来していることが確認され、その後、年ごとに数を増してきています。昨シーズンの2011/2012年の冬季には、全国に飛来したシジュウカラガンの総数は248羽にもなりました。この中には、全体の12%を占める29羽の幼鳥も含まれていることから、自然繁殖の結果、個体数が増加していることがうかがわれます。まだまだ安心できる羽数ではありませんが、今後の順調な羽数回復を期待したいと思います。

現在は希少種となってしまったハクガンも、百年ほど前まではマガンと同様に普通に日本へ飛来していたことが分かっています。白く目立つことや、強い集団性を持つために狩猟されやすかったこと、また、ツンドラ地帯で導入されたトナカイの放牧がハクガンの繁殖環境を破壊したことなどがハクガンの群れをアジアから消滅させた原因とされています。現在、アジアでは唯一、北極海に浮かぶウランゲル島で約6万羽のハクガンが集団繁殖していますが、この群れは北米大陸で越冬しています。そこで、この群れを人為的に分散させる形で、アジアで越冬する個体群を復元させようという計画が、1993年より日・ロ・米の研究者などによる国際共同計画として実施されています。この計画の目的は、アジアに一か所だけという危険な状況にある集団繁殖地を、かつてのように北極海沿岸部に分散させることです。

1993年には、ウランゲル島の繁殖地でハクガンの卵を100個採集し、日本に渡ることが知られているマガンの繁殖地である北東シベリアのアナディリ低地に移送しました。そこで、41個の卵はマガンの巣にあった卵と入れ替えられ、他の43個は孵卵器で孵され、足環標識をつけたうえでアナディリ低地のマガンの繁殖地内の沼で放たれました。北東シベリアと日本の間を往復するハクガンの渡りの道を復元させるために考えられた手順です。

翌年、1994年の繁殖期には、マガンの親に連れられたハクガンの幼鳥がアナディリ低地に戻っているのが確認されました。また、1996年夏にはアナディリ低地から南へ100kmの地点で、標識付きのハクガンが番いを形成し幼鳥4羽を連れているのが発見されています。また、越冬地である日本と韓国でも標識付きのハクガンが1例ずつ観察されていて、移送されたハクガンのヒナが渡りを学習し、繁殖するまでになっていることがうかがえます。

日本に飛来するハクガンの数は、計画が始まる前は、数年に1羽見られる程度の希少種でしたが、計画が開始された1993年を境に飛来数が増加し続けていて、2009/2010年から2011/2012年の最近3年間の冬には、40-50羽のハクガンの飛来が観察されています。ハクガンの群れも、幼鳥を含む家族群で構成されていることから、今後の自然繁殖による増加が期待されます。

このように、シジュウカラガンとハクガンの羽数回復の試みは、まだ完全に安心できるところまでには至ってはいませんが、確かな手ごたえが感じられるところまでは進展しています。しかし、この他の希少種であるサカツラガン、カリガネについては、いまだに具体的な羽数回復の手立ては講じられていません。シジュウカラガンとハクガンの羽数回復計画での完全な目標達成に向けて残されているさまざまな課題も含めて、希少種の羽数回復の問題は、これからの日本のガン類の保護を考えていく上での大きな課題のひとつといえます。



写真2. 北海道十勝川下流域に飛来したハクガンの群れ
2011. 11. 5 撮影：久保清司

ガン類生息地の拡大に向けて

もう一つの課題は、ガン類の生息地の問題です。警戒心の強いガン類が生活するためには、安全に夜を過ごせる「ねぐら」となる広い水面と、食物をとるための「採食地」となる広い田んぼなどの耕作地や草地が必要です。この二つの条件を兼ね備えた場所は、かつては日本全国に広く分布していたのですが、上述のように、日本の近代化とともに各地から消滅していき、マガンやヒシクイが定期的に渡来する生息地の数は、1950年代には全国で約150か所に、1970年代には約50か所までになっています。マガンの全国への飛来数が増加に転じて、約20万羽にまでに増加した現在でも、中継地、越冬地などの国内の生息地の数は、1970年代当時とほとんど変わっていません。このため、限られた数の生息地へマガンの大群が集中する状況になっています。宮島沼、小友沼、伊豆沼、蕪栗沼などが典型的な例です。このような限られた場所への一極集中状態は、鳥の伝染病による被害を避けるうえでも、必要な食物を確保するうえでも望ましいことではありません。かつてのように、生息地を分散させることが望まれます。

ガン類の生息地を広げるために、日本雁を保護する会は「ふゆみずたんぼ」に取り組んでいます。これまで、多くの水田では、稲刈りから翌年の田植えの時期までの冬の間

は、田んぼに水を入れないで乾田の状態にしておくことが一般的でした。そこで、稲刈り後の田んぼに水を蓄えて新たな水辺をつくり、マガンのねぐらに使えるようにしているというのが「ふゆみずたんぼ」です。「ふゆみずたんぼ」は、ガン類のあらたな生息地となるばかりでなく、昆虫やさまざまな水生生物が生活できる場所を作り出し、シギ・チドリ類の採食場ともなります。「ふゆみずたんぼ」のこのような生物の多様性を保つはたらきは、乾田の状態とは比較にならないほど大きなものがあります。

さらに、「ふゆみずたんぼ」は、農業の面でもさまざまな恩恵をもたらします。冬の田んぼに水を張ると、そこには小さな菌類やユスリカ、イトミミズから大きな水鳥までさまざまな生き物でにぎわう結果、田んぼにとって良い肥料を与えることになります。また、イトミミズ類の増加は、雑草の種を下に埋め込む働きをすることで、田んぼの雑草を減らす効果があることもわかっています。「ふゆみずたんぼ」で、蕪栗沼周辺の水田に、ガン、カモ、ハクチョウ類の生息地を創出させた実績のある宮城県大崎市田尻では、2004年度から、「ふゆみずたんぼ」と「無農薬・無化学肥料」とを組み合わせた環境共生型栽培に対して支援が始まり、その後国も支援をおこなう仕組みもできています。

2005年には、蕪栗沼周辺のこのような取り組みを更に推進していくために、沼とその周辺の田んぼを積極的に

含む初めてのラムサール条約湿地「蕪栗沼・周辺水田」が誕生しました。このような、自然環境に配慮した持続可能な水田農業に転換していこうという機運は国内にとどまらず、国際的な潮流になりつつあります。2008年に韓国昌原市で開催された、ラムサール条約第10回締約国会議（COP10）では、日韓政府より共同で提出された、水田決議「湿地システムとしての水田の生物多様性の向上」が採択されました。この会議には、日本雁を保護する会もNGOとして参加し、水田決議の採択に向けて支援をおこなっていました。

さて、宮城県大崎市田尻で先進的に取り組まれてきた「ふゆみずたんぼ」の方法を、全国に広げていくことで、かつてのように、日本国中のいたるところで、ガンのいる風景をよみがえらせることができるはずですが、簡単なことではないことも事実です。日本の近代化とともに、生産量と効率を追求する農業や工業を推進させながら我々の「豊かな生活」を得るなかで、多くのガン類の生息地は失われました。「ふゆみずたんぼ」という農業の転換とともに、他の分野のさまざまな人間の活動の転換なしにはガン類の全国への復元はかなわないでしょう。これからの大きな課題ですが、全国の仲間とともに、夢の実現に向かって努力していきたいと思います。

札幌市北区篠路にカナダヅル

札幌市豊平区在住の吉野一郎さんからカナダヅル（成鳥）の写真が寄せられました。撮影日は2012年5月12日、場所は札幌市北区篠路です。午後3時頃、アオサギの繁殖コロニーがある五ノ戸の森近くで野鳥写真を撮っている時に北の方から上空に現れました。森の木にでも降りるかのようにでしたが、アオサギに騒がれ、またカラスにもまとわりつかれたため、ま

た北の方へ飛んでいってしまったそうです。

カナダヅルは主にタンチョウの群れに混じって道東などに飛来することがあるのですが、道央では極めて希で、札幌市およびその近郊では、2004年5月の江別市篠津への飛来に次ぐ2例目になるとされます。（広報部）



ハシグロアビの記録（稚内市抜海港）

留萌市 佐藤 圭

2012年4月16日、北海道稚内市抜海村の抜海港で、大形アビ類の一種であるハシグロアビを観察・写真撮影する機会に恵まれましたので報告します。

抜海港は野生ゴマフアザラシの越冬場所として最近名が知られてきております。風景、野鳥、波などの写真で何かを伝えられたらと思っている私は、この日朝からアザラシ数十頭の群れを撮影していました。午前8時近く、アザラシたちのすぐ横を、今まで見たことのない、珍しい顔つきの鳥が通り過ぎようとしたので、何はともあれ大急ぎで撮影しました。中央の防波堤沿いで、堤上ではカモメの群れやウミウが休んでいました。正面に回り込んで撮影をと思って防波堤の逆側に行きましたが、警戒されたのでしょうか、潜ってしまい、次に出てきた場所は遥か沖でした。大きさはウミウと同じような感じでした。

撮影した写真を、名前がわからない時はいつも教えてもらっている日本野鳥の会旭川支部会員の野村真輝さんに見せ、さらに野村さんを通して支部長の柳田和美さんに見てもらいました。その結果、アビ類ではあるが、大きくがっしりとした嘴や、前頭部の盛り上がりからアビ、オオハム、



ハシグロアビ 2012. 4. 16 稚内市抜海港

シロエリオオハムではないこと、嘴が黒っぽく、まっすぐなことから、ハシグロアビ（嘴は白っぽく、やや上反り）とも違うということで、考えられるのはハシグロアビで、背に白斑（白点）が散在していることから、冬羽から夏羽への換羽中だろうということになりました。

北海道ではもちろん、全国的にも極めて珍しいだろうということで、野村さんの発案により北海道新聞旭川支局に連絡して記事にしてもらおうということになりました。念のため同支局から山階鳥類研究所に確認依頼をしたところ、ハシグロアビに間違いはないということになり、5月9日の朝刊（全道版）に「方向間違え？稚内に珍鳥＊北米のハシグロアビ アマ写真家撮影」として掲載されました。新聞記事だけでは記録として残りにくいということから、さらに今回この報告を書かせていただきました。

以下、何人かの野鳥関係の方々から伺ったことです。ハシグロアビは北アメリカ北部やアイスランドなどに生息する鳥です。日本鳥類目録改訂第6版（日本鳥学会 2000）には記載がありませんが、例えば「海鳥識別ハンドブック」（箕輪義隆/著、文一総合出版、2007）によると、1992年2月23日に岩手県三陸町吉浜湾、1995年5月7日に青森県三沢市砂森沖、2003年4月2～3日に北海道稚内港で観察記録があることになっています。でも、「本種と考えられる記録」という表現ですから、確定記録ではないのかもしれない。

山階鳥類研究所では、「渡りの途中で何らかの理由で方向を間違えて飛来したのでは」と推測しています。私自身は、珍しい鳥だと知らされて驚き、興奮しているとともに、これを機会に、今後も野生生物を写真で表現したいという気持ちをさらに一層強くしております。

【閑話】 野鳥あれこれ 日本鳥類目録の改訂

現在の野鳥図鑑等での鳥の並べ方は基本的に日本鳥類目録改訂第6版（日本鳥学会 2000）に基づいています。でも、今年の秋には第7版が発行される予定で、そこでは分類や種の配列に少なからず変更があるようです。

当会が探鳥会での鳥合わせに使っているチェックリストもそれに合わせて新しいものにしなければならないかもしれません。ちょうど在庫がなくなった頃にうまく切り替えができるといいのですが。

今度の変更は図鑑作成・発行などにだいぶ影響がありそうです。来年からのものは新しい分類・配列にしなければならないでしょう。「分類なんかどうでもいい」という人もいるかもしれません。でも、わからない鳥がいても、だいたい「何々の仲間」ということがわかれば、識別に役立ちます。この仲間の鳥は図鑑のだいたいこのあたりに載っているだろうということも見当がつくようになります。きっと楽しみが増えます。（広報部）

双眼鏡をちょこっと置いて

札幌市白石区 浜 野 チエ子

高山にいるはずの「ホシガラス」が2009年（平成21年）、よりによって師走の気ぜわしい時期に北海道神宮へ舞い（迷い？）降りたのです。12月の棚卸し準備も、年末のお掃除もそこそこに、一丁前に500mmレンズを装着し、腰痛をも忘れて追いかけたのでした。

写真の出来、不出来はさておき、大雪へ行かずともこんな間近でお目にかかれたこの喜びを仲良しの友に「神宮にホシガラスがきたのよ！」とおすそ分け。



ホシガラス 2009. 12. 13 札幌市円山 筆者撮影

その友、毎月2回は白石神社に参拝をし、人様のお世話を惜しみなく手をさしのべる奇特な人。その友が「それはタダのカラスではないわ、神宮に降りたのだから」と身を乗り出し目を輝かせ声にも力が入ります。そして、話に花が咲き「ホシガラス」は「カラス」でもいつの間にか「三本足のカラス」の横道へと…そして「三足鳥」の登場があります。

三足鳥の神話とは？三本足の意味は？と、マウスをポッチンポッチンしてみると、太陽の象徴とか、陰陽では3の奇数は太陽と同じ陽となるとか、「智」「仁」「勇」の三徳の説、「天」「地」「人」を表す等々、国によっていろいろな説があり、難しい名前、読めない漢字がいっぱいでポッチンポッチンは深夜まで。

日本では「八咫鳥」と呼ばれ（「咫」は長さの単位で親指と中指を広げた長さですが、ここでの八咫は「大きい」という意味らしい）、神武東征中、熊野で神武天皇を導く役割を担ったとあり、熊野本宮大社の八咫鳥幡、熊野速玉大社、那智大社の張幕の神紋、天皇の礼服の紋章は日輪の中に八咫鳥の刺繍、日本サッカー協会、陸上自衛隊中央情報隊のシンボルマークになっているのがわかり、一言に鳥と言えど、ありがたく、神々しい鳥なのでした。

その結果、友はその年のサンタコンサート（注1）で、これも何かのお導きと「神宮のホシガラス」の写真を購入、自宅の神棚の横へ奉り毎日のお参りは言うまでもありません。私の結果といえば「ホシガラス」から「三足鳥」を追いかけて脱線転覆！重傷！

紋章を「三足鳥」とする韓流ドラマ「朱蒙」にはまった！のでした。

高句麗初代王「朱蒙」は紀元前1世紀を背景に建国物語は始まります。朱蒙を演じるイケメン「ソン・イルグク」の存在感ありのかっこよさに魅了されつつ、他国の壮大なスケールの時代劇のロケ地、セット、衣装、出演者、音楽等々は日本とはまた違った目新しさに引き込まれます。祖国愛、家族愛、友情、ロマンス、裏切り、報復、嫉妬、悲哀等々の織り込み方が分かり易く、賢く、丁寧に展開されていくのです。

その後は「風の国」高句麗3代王大武神王（テムシン王 朱蒙の孫 無恤）の物語があり、高句麗第19代広開土太王の「太王四神記」（音楽担当は日本の久石譲氏）へとおもしろさは続いていきます。

李朝時代を背景にした「宮廷女官チャングムの誓い」ではストーリーもさることながら理にかなった食と健康、医術に興味深く見入り、私自身の生活をも省みることがしばしばでした。



三足鳥の紋章 韓国ドラマ「風の国」より

他の劇中でも、表具類に描かれている鳥、湖沼を渡る鳥の群れを見つけると嬉しく、森の中で人の気配で驚きの鳴き声をあげアップになった鳥がなんと「アカショウビン」！まさか？まさか？拝む気持ちで画像を止めてしっかり確認をしました。

おや？衣装の地模様に紗綾形を発見！（「遠山の金さん」

のお白州の襖の柄) 日本独自の模様だとずーっと思っていたのに、そうではなかったのです。

こうなると調度品、装飾品、陶磁器等からも目を離せず、特にロケ地の風景には要注意で、ワクワク感が広がってきます。

女優はシミひとつなく美しく、大粒の涙をこぼし、子役の名演技には毎回こちらが泣かされます。男優はたくましく優しい…昔の忘れ物を取り戻してくれる…そんな「ヨン様」を日本の年配女性が追いかけたのかもしれませんが。でも、私は「ヨン様」を追いかけてはしません。

こうして画面を通し他国の歴史に触れ、熱い人間愛に感動し、記憶の修正もし、鳥に癒されている今、「ホシガラス」から韓流ドラマへの脱線転覆も悪くなかったと…。

そして友に感謝です！

韓国語の耳障りな部分にも慣れ、ハングル文字で書かれた題名、俳優の名前、札幌地下鉄ホームのハングル文字の

駅名にも目をやるようになったのが嬉しいおまけ。

次のおまけを見つけない！まだまだはまったままで抜けられず… To be continued.

さてさて、ちょこっと置いた双眼鏡はお忘れなきようお手許へ。

(注1) 北海道野鳥愛護会の役員でもある田中陽氏が代表の「12人のサンタクロース」という団体が19年間毎年年末に開催し、札幌市内の5箇所の児童養護施設への寄付等と施設の子供達を招待して行われるチャリティコンサート。田中陽氏撮影の鳥の写真やポストカード、写真カレンダー等の売上げの収益金も同時に寄付される。室内楽、ミュージックベル演奏やクラシックギター演奏などロック、ポップス、クラシック、ジャズ、フォークなど幅広いジャンルのプロのミュージシャンのライブ演奏会。

置戸町・鹿ノ子ダムでチョウゲンボウを観察

NPO法人EnVision環境保全事務所 中 森 達

2012年7月23日の夕方、私は陸別での野外調査を終え、車中泊する場所を探していました。基本的に水道とトイレさえあればどこでもOKなのですが、できるだけ快適に過ごせる場所を求めてウロウロしていたわけです。ようやく鹿ノ子ダム管理所前の広場に理想的な場所を見つけ、静かな夕暮れ空をバックに群飛するイワツバメやハリオアマツバメを愛でながら、優雅な(ボンカレーの)夕食を楽しんでいました。

この難点をあげるとすれば携帯が繋がりにくいことで、食事後に電波を求めてダム堤体上を歩いていた時のこと、対岸(左岸側)の駐車場脇の枯れ木にハト大の鳥が飛んで

きて止まったことに気づきました。やがて飛び立ったそのシルエットはハヤブサ形で、当初はチゴハヤブサかと思いましたが、そうこうするうちにホバリング(空中停飛)を始めるではありませんか！急いで車からデジカメを取ってきて撮影してみると、尾羽の先端が黒いことが分かり、チョウゲンボウと判断しました。

観察時刻は18:30~50で、翌24日も早朝(5:00~30頃)と夕方(18:20頃)にダム堤体付近で観察することができました。日中は当所に居なかったので観察できていませんが、定着している可能性を感じました。

撮影した画像から年齢と性別を推察すると、頭が青灰色(雄の特徴)ではないこと、尾羽に細い横帯が複数見られることから雌成鳥か幼鳥ではないか考えられました。また、両者の区別点とされる風切先端の淡バフ色縁が明瞭なことから、今のところ性別不明の幼鳥と判断していますが、なにもぶんに初めて観察する種ですのでハッキリしたことは分かりません。識別方法などご教示いただければ幸いです。

何人かの方に道内での夏季の観察事例を伺ったところ、比較的少ないのでは、とのこと。今回は藤巻裕蔵先生(北海道野鳥愛護会顧問)に投稿をすすめていただきました。発表の場を与えていただき感謝いたします。最後に、当地では夕暮れ時にクマタカやヨタカを、夜には満天の星を、早朝にはミサゴを見ることができ、とてもリッチな気分になったことを付記させていただきます。



チョウゲンボウ 2012. 7. 23 置戸町・鹿ノ子ダム

野付半島のワタリガラス

標津郡中標津町 中 田 千佳夫

ワタリガラス。野付半島には毎年12月の下旬に姿を現します。オオワシの姿が野付湾の氷上に多くなる時期と重なります。実は知床半島にはひと月早い11月下旬に姿を見せています。この時期に大量に遡上して来るサケやマスを狙って川にたむろするヒグマの食べ残しが、ワタリガラスの目的です。見られる数は多くなく、川ごとに1羽だったり、4,5羽でいたり目立ちません。魚が多く上がってきてクマが多く集まるところには、多く集まっているような気がします。ただクマがいるものですから…。

12月に入るとヒグマたちは冬眠に入るためにおこぼれが少なくなります。当然餌を求めて移動が始まります。このころ根室海峡はコマイが産卵のために海岸に寄ってきます。野付半島の沖は道内で最も大きいコマイの産卵場になっていて、コマイの定置網漁が始まっています。ワタリガラスはこのコマイ漁のおこぼれを目当てに集まってくるのです。コマイ漁の定置網は野付半島の半分から先の方で



写真1. 魚捨て場に集まるカラスたち。コマイ漁の定置網に入ったカジカとアザラシの死体の山。

仕掛けられ、当たり年だと11トントラックが野付街道を尾岱沼港までピストン運転しても間に合わないくらい獲れます。しかし好不漁があって、獲れない時は頭のかいカジカ類が多く入っていて、荷揚げされるとそのほとんどが海岸に掘られた穴の中に捨てられます。この魚はオオワシやオジロワシ、カモメたち、カラスの仲間たちの「ありがたい食料」になります(写真1)。

12月下旬の気温は野付湾内が凍っていく時期に当たり、氷点下10℃以下になる日が多くなります。そのため山積みされた魚はかちんかちんに凍ってしまいます。鳥たちにとっては簡単には食べられなくなってしまうのです。その代り、厳冬期の越冬用食料として重要な役目を果たすよう

になります。集まってくる鳥たちが少しずつ引きちぎってしか食べられないので、それが無くなるまでに春先までかかってしまうのです。

ワタリガラスはこの冷凍食料庫みたいな場所の常連で、キタキツネが掘り開ける穴の中より、強い嘴で下に埋まっている魚を引き出しては食べていました。力のないハシブトガラスやハシボソガラス、それにカモメたちはそのおこぼれをあてにしている風です。



写真2. アザラシを食べるオオワシの幼鳥を囲んで、獲物にありつけるのを待つカラスたち。

もう一つワタリガラスを引き付けている要因は時々海岸に放置されるゴマフアザラシとトドの死体です。コマイ漁の定置網に紛れ込んで溺れ死んだもので、荷揚げ場の近くに放置されます。これをオオワシやオジロワシ、キタキツネが強く鋭い嘴と歯で硬い皮を引き裂き突破口を作ります。それを周りから見ながらワタリガラスやハシブトガラス、ハシボソガラス、カモメたちが待機します(写真2)。20羽、30羽と集まって強いものから食べていくワシたちがいるときはなかなか近寄れませんが、警戒感の強いワシが人や車の気配で移動すると、カモメとカラスたちがたちまち群がります。

神経質で用心深いワタリガラスはすぐには来ませんが、体が大きいのでやってくるとすぐにワシのように死体の上に陣取ります。畏怖堂々としたずるっこカラス、っていう感じです。

食べ物を巡るだけでもワタリガラスの生活はなかなか面白く、興味をそそられます。でも私がしっかり観察できるようになったのは、今年の冬季からです。それはしっかり識別が出来なかったからです。以前から「カボツ、カボツ」という素っ頓狂な声を頼りに見てはいました。しかし、そ

れは羅臼や摩周湖、藻琴山などで春先に風に乗って上手く飛ぶ姿を見てただけです。実際に間近でワタリガラスを見ることはありませんでした。だから、識別なんて簡単だと思っていました。でも野付半島でハシブトガラスやハシボソガラスに混じっているワタリガラスを確信を持って見極めるのは毎年至難の業でした。たかがカラスの仲間、ほとんど興味を向けることはありませんでした。

日本では北海道にごく少数が渡ってくるワタリガラスですが、分布は広く、赤道より北のアフリカを含めユーラシア大陸と北アメリカ大陸に棲んでいます。ヨーロッパや北アメリカでは馴染みの深い、どこにでもいるカラスなのです。オオガラスと言われるように世界最大のカラスであるためか、古来より人々に畏れ敬われることが多く、その鳴き声が吉凶を知らせる目安となったり、賢者になぞらえられたりしています。

特に、イヌイットやインディアンの創生神話ではワタリガラスはとても重要な役割を担っていることが多いのです。これらの神話では、カラスは太陽の使いというよりもむしろ神に近い位置づけとなっています。それも人々のために太陽を盗み出したり、生活指導を行ったり、自然の摂理を乱してでも人々の側に立つ任侠な姿に描かれていることが多いようです。

北欧神話には主神オーディンがフギン（＝思考）、ムニン（＝記憶）という二羽のワタリガラスを世界中に飛ばし、二羽が持ち帰るさまざまな情報を得ていたとあります。イギリスではチャールズ2世の勅令で最低6羽のワタリガラスがロンドン塔で飼育されており、「ロンドン塔からワタリガラスがいなくなるとイギリスは滅びる」というジンクスになっています。

調べるとワタリガラスの神話や伝説はあちこちにあります。それほどワタリガラスが古代より人々とのかかわりがつよかったということです。創生の時代においてワタリガラスは八面六臂の活躍をしてきたのです。面白いことにこれらの創生神話は北の地域を中心に多く残されて分布しているようです。まあ、それだけ生活に近いところにワタリガラスがいたのでしょう。

野付半島に通いだして10年になる私ですが、ワタリガラスは遠い存在でした。歩いていくと遠くから警戒され、さっさと餌場から飛んで行ってしまうのできちんと姿を見ることができませんでした。ハシブトガラスやハシボソガラスの中に入ってしまうと、確信を持って識別することはできません。毎年、野付半島通い30年になる鳥キチの藤井先生に「来ていますよ。6羽で行動しています。」と細かい情報をいただくのだけど、声を聞くまではさっぱり確信がとれません。今年はどうしても自信を持って識別がしたいと固い決心をしました。

まずは基本から。ハシブトガラスとハシボソガラスをじっくり観る（写真3～5）。体の形、羽の色や形、つや、仕草、行動。とにかく観続ければ、いつか瞬時にこの2種の違いを確信できる。ひたすらカラスが集まる場所に張り付きしました。

皆さん。飽きるほど見ると違いが見えてくるものです。目と脳が自然に識別してしまいます。これはお茶の作法とそっくりだと認識しました。ワタリガラスがいるのも気配でわかるようになりました。できるだけ逃げないように近



写真3. おでこが飛び出しているハシブトガラス



写真4. ワタリガラス（左）とハシブトガラス（右）。体の大きさと首の飾り羽に注目。



写真5. 飛んでるワタリガラス。喉から胸にかけての飾り羽毛に注目。1枚1枚が長く、光沢がある。鱗のように見える。

くまで行けるようになりました。

体の大きさが似ているハシブトガラスとの違いがはっきりしました。額の形。ハシブトガラスはおでこがでっぱっています。ワタリガラスは嘴からおでこに行くラインがスムーズ。次に喉から胸に至る頸回りの羽。ハシブトガラスは羽は細かくて繊細、しかもさらさらしています。一方、ワタリガラスの頸回りの羽は1枚1枚が長く垂れ下がり、重なり、ふっくらして、光沢があつてつやつやしています。鶏のオスの頸の飾り羽に似ています。私には首の飾り羽が一番見分けるのに役に立ちました。時たまふくら膨らせることがあり、その時はとてもよくわかりました。

形態が分かってきだすと行動が読めてきます。いつもたむろしている場所、こちらに気づいていち早く隠れてしまう場所、餌をくわえて行って隠す場所、ねぐらにしている林、アザラシの死体が上がって集まってくる範囲、などいろいろ確かめられました。

餌場から飛び去るときに一つのパターンがあるのに気づきました。必ず海の方に飛び出していくのです(写真6)。そこから海岸に沿って我々からの死角のポイントに行きます。流水が来たときは、群れで真直ぐ沖合に飛んで行きました。双眼鏡で見ても小さな点になるくらいのところまで行って流水の上に降りていました。私がいなくなるまで、帰って来たことは1度もありませんでした。

もう一つ、彼らは屋根や電線、テトラポット、電柱、杭



写真6. 沖合の流水に向かって飛んで行くワタリガラス

などには止まりませんでした。いつも湾内の氷の上か砂地の地面、木の上におりていました。不思議でした。また遠くで見ていると仲間とよく遊んでいました。よく飛び回り、追いかかけ合ったり、風に乗ってアップダウンを繰り返したりと愉しむ術を身に着けているようです。

今年は野付半島には18羽のワタリガラスが来ていました。12月から3月に毎週日曜に会いに行きました。識別がきちんとできるにつれ、愉しみが増しました。彼らは4月初めに消えましたが、今年来ていたワタリガラスは藤井先生によるとすべて口の中の色がピンク色の若鳥だったそうです。私にはさっぱり判りませんでした。

来 年 の 年 賀 状

当別町 道 川 富美子

私は、鳥好きの証として、その年印象に残った鳥を翌年の年賀状に描くことにしていました。セイタカシギから始めて、ヤマセミヤコチドリ、ミヤコドリなどずっとそうでした。描くなんて言っていますが、パソコンの一番前のお絵かきソフトを使い、マウスをクリックして点を並べるだけの作業です。色数も少なく、それらしく見えるかどうか心配で、鳥名を書き入れたりしてごまかしてきました。

ここしばらくは『我が家にやってくる鳥達』シリーズと銘打っていて、数えてみると10種いました。最初はヒヨドリ、アカハラ、シジュウカラ、ニュウナイスズメ、次はコゲラ、アカゲラ、ツグミ、今年はエナガ、ゴジュウカラ、カケスでした。

今8月頭、そろそろ来年の鳥さんは誰にしようかと気に掛かってきました。外を見ていたくて窓にカーテンを掛けていないので、何をしても鳥影に手を止めてばかりです。

朝夕シジュウカラとハシブトガラの子鳥が群れて

仲良くやってきています。鳴いて小枝をつついて、長居していきます。ハクセキレイは4羽巣立ったようで、餌ちょうだいとおねだり声が移動しています。ヒヨドリがブルーベリーの实を狙って向こうの林からにじり寄ってくるのが困りもの。先にジューンベリーを全部提供したのが、悪かったのか。

コゲラの幼鳥の声が近くの林から聞こえています、ま



だ我が家の庭までは来ていなさそう。ニュウナイスズメやカワラヒワはもはや声がしなくなりました。

少し前まではホオジロの囀りがにぎやかでしたが、我が家一歩手前です。

窓から見える広葉樹の林には小さな沢も入っていて、春

はオオルリやキビタキ、キセキレイなどが囀り、雪の頃はレンジャクやアトリも止まっているのが見えるのですが、今のところ我が家までは来てくれていません。

というわけで、来年の年賀状はまだまだ決まりそうもないのです。



鵠川河口

2012. 5. 27
札幌市北区 樋口 孝城

あれは5年前の2007年、今回と全く同じ5月27日のことでした。鵠川河口は総数で1,000羽を優に超えるトウネンで埋め尽くされました。時に一つになり、時には二つ、三つに分かれて飛び交い、また一斉に岸近くに降りる様はまさに壮観でした。キョウジョシギ、ハマシギ、オオソリハシギ、チュウシャクシギの小群もありました。アカエリヒレアシシギまで見られました。当日は雨の予報のためか、参加者はいつになく少ない18名。幸運の人達です。正午近くの鳥合わせ直前にハヤブサです。シギたちはみんななくなりました。本当に全部なくなりました。

探鳥会が始まる前にハヤブサが飛んだら惨めです。「全然いないねえ」、「せっかく早起きして遠くまで来たのに…」とがっかりするわけですが、実はその直前まで大賑わいだったのかもしれません。

今回見られたシギ・チドリはトウネン2羽とイソシギ1羽だけで寂しい限りでした。でも、地元の門村さん（今回の担当幹事）によると、良い思いをする日は決して少なくはないとのこと。鵠川探鳥会は春と秋の1回ずつだけです。これだけで良い思いをしようとするのは虫のいい話かもしれません。もしかしたら今度の秋は…、来年の春は…。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、カルガモ、ヒドリガモ、コガモ、トウネン、イソシギ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、シロカモメ、カッコウ、ヒバリ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上20種

【参加者】秋田雅雄、阿部真美、五十嵐加代子、門村徳男、桑原みは子、坂井伍一・俊子、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋宣子、高橋良直、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、徳田恵美、中島房子、中正憲佑・弘子、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、松尾幸雄、道川富美子、柳川 巖、山本和昭、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸

以上32名

【担当幹事】門村徳男、中正憲佑

平和の滝

2012. 6. 2

ヒグマ出没の危険性があるため中止としました。「鳥民だより」のお知らせをご覧ください。

植苗ウトナイ

2012. 6. 3

札幌市北区 阿部 真美

思いがけず野鳥を見るようになり、何年かが経ちました。探鳥会の朝一番にするのは天気予報の確認です。今朝の札幌は快晴…でも、これから向かう苫小牧方面は曇りで最高気温14度。残念ながら寒い探鳥会になりそうです。

趣味を持つと、ストレス発散にもなるけれど、同時に趣味自体がストレスになる事があると話している人をテレビで観ましたが、「たしかに」とこの頃思います。以前は雨の週末だって悪くなかったのに、今では週間天気予報を毎日見ては、週末が雨だと怒りすら感じてしまうのです。困ったものです。

と、話しがそれてしまいましたが、本日の探鳥地は植苗です。昨年はクロハラアジサシに歓声があがりましたが、果たして今年は何が出てくれるのでしょうか。この出発前のワクワク感こそが、探鳥会の最大の魅力だといつも感じます。誰にも完全な答えは出発前にはわかりません。だから、私は、植苗の出発時にはシマアオジが出てくれる事を夢見しています。可能性はゼロではない。それが素敵です。

さて、結果はというと、とても寒かったせいでしょうか？全体的に鳴声・姿共少なめでした。それでも気の毒に思ってくれたのか、植苗での楽しみの一つ、オオジシギ達のディスプレイ飛行は堪能できました。何度も何度も現れては大きな尾音を発して急降下。尾音は後ろで何かの機械が動いたのかと振り返る程の音です。今回はここで皆の歓声があがりました。帰りの車中、図鑑を見ると、あの尾音を発する尾羽は16枚又は18枚とあり、Tさんに先程撮影した写真の1枚を拡大してもらおうと16枚でした。この一連の作業が実に楽しく、図鑑と照らし合わせては「凄い！本当だ！」と、いつも感動してしまいます。他に、綺麗な囀りとともに、美しい雄のノゴマも現れてくれました。行きに見られなかった人の為に、帰り道でも同じ場所で囀ってくれました。

鳥あわせを済ませてからの帰り道、クロツグミとオオルリの声が聞こえ、リストに入れられず残念に思いましたが、これまた、全ては鳥の気分次第、という人間の無力さを実感させられる大切な瞬間でもあったのです。こんなふうに、本日も楽しい時間を皆様と過ごさせていただきました。いつも感謝しています。

さて、余談ですが、最後の最後に「チリリリリ」と路肩から確かに聞こえたのであります。私は、これが鳴きかけて止めたマキノセンニュウだ！と思ひ込んでいます。名乗ってくれなければ本当の所はわかりませんから、自分の



オオヨシキリ

中ではそういう事にして、ニンマリとしているのです。鳥見は本当に奥が深いのです。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオハクチョウ、オオジシギ、キジバト、ツツドリ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上28種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、大表順子、香内 実、坂井伍一、品川睦生、高橋宣子、田中 陽・雅子、辻 雅司、戸津高保・以知子、浪江正幸、畑 正輔、樋口孝城、本間康裕、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸

以上22名

【担当幹事】田中 陽、鷺田善幸

厚 別 川

2012. 6. 10

札幌市厚別区 伊藤 信治

素人の私に何か感想を！と依頼を受けてペンをとりました。今回の集合場所「川下公園」は、市木であるライラックを多くの市民に楽しんでもらおうと造成され、現在では200種を越えるライラックの花が5月中旬から7月上旬まで次々と咲き、リラの香りを漂わせ、近くには厚別川が流

れ、多くの小鳥達が飛び交うなどすばらしいコースでした。

頭上の野鳥を瞬時にあれは〇〇、また、鳴き声によってこれは△△ですと教えていただき、その動体視力や声を聞き分ける耳の良さには、ただただ驚かされるばかりです。

私は運動不足の解消と、少年時代に聞いた野幌原始林を舞台としたラジオドラマを思い出し、その森を見ようと昨年春から散策を始めました。そんな時に野鳥愛護会を知り、参加が自由で申し込み不用も大きな魅力でした。動機が不純のせいか、参加してまだ回数が少ないためか、いつまでたっても鳴き声による識別はもとより、木々に止まっている場所も探せず苦労の連続ですが、散策を重ねるうちに自然の動植物に魅せられる事が多くなり、大げさですが自分の目で見た鳥達を記録に残そうとコンパクトカメラ片手に頑張っています。

厚別川周辺の探鳥会と聞き、昨年の「野鳥だより」第165号によると出現した数が34種など、品川睦生氏の記事を読み、驚きと期待をもって参加しました。歩き始めるとさえずりと共に、河川敷の草原から虫などの餌を運ぶ親鳥、餌を待つ幼鳥など多くの姿を見る事ができ、改めて探鳥のすばらしさを実感、いつもながらの2時間前後の散策が短く感じた一日でした。

幹事さんを初め、会の皆さんから親切に教えていただき、誠にありがとうございました。また参加させていただきますので、今後とも宜しくお願い致します。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チゴハヤブサ、マガモ、キジ、イソシギ、オオジシギ、オオセグロカモメ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、メボソムシクイ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上31種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、荒木良一、伊藤信治、今村三枝子、大表順子、大田敏枝、加藤文夫・千春、川東保憲・知子、木下米子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、坂井伍一、品川睦生、柴田道彦・久美子、清水朋子、杉田範男、高橋きよ子、高橋宣子、高橋良直、立田節子、田中 陽・雅子、戸津高保、中正憲佑、野田貴代子、畑 正輔、浜野チエ子、樋口孝城、広木朋子、本間康裕、松原寛直・敏子、安真一郎、山本康裕

以上39名

【担当幹事】坂井伍一、畑 正輔

野 幌 森 林 公 園

2012. 6. 17

集合時には小降りだった雨がだんだん本降りになり、鳥の姿はほとんど見られませんでした。また、鳥の声も雨音に消されがちでした。途中、遊歩道の水溜まりが大きく

なって歩きにくくなり、また、遠くから雷鳴が聞こえてきたため、短縮コースを通して集合点に戻り、切り上げ終了としました。(担当幹事報告)

【記録された鳥】キジバト、ヒヨドリ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、アオジ

以上8種

【参加者】青木裕子、秋山洋子、香内 実、小山久一、実松由夏、品川睦生、清水朋子、高橋貴美子、高橋泰勝、中正憲佑・弘子、成澤里美、樋口孝城、辺見敦子、横山加奈子

以上15名

【担当幹事】品川睦生、横山加奈子

福 移

2012. 6. 24

札幌市中央区 香内 実

集合時刻に少し遅れてしまったことをお詫び致します。牧草地の一番草の刈り取り真っ最中で、堤防の道路は初夏の心地よい風に牧草の香りをのせ、気分爽快にヒバリの囀りとトビが迎えてくれました。

私にはトビにまつわる話があります。以下、トビの雌雄(母鳥・父鳥)や、成幼(親鳥・子供)の区別は私が頭の中だけで勝手に考えたものですから、そのつもりで読んで下さい。

以前住んでいた家の裏に大きなイタヤカエデの木があり、そこにトビが巣を造りました。やがて2羽の雛が誕生し、番いで子育てしているのを観察していました。ある日母鳥の悲鳴みたいな声が聞こえたので見ると、ハシブトガラスの攻撃を受けているではありませんか。父鳥は遠くまで餌を探しに行っているのか、助けにきてくれません。私は咄嗟に玩具のピストルを撃つ構えをして、大声でカラスを追い払ってやりました。その後も何度か同じようなことがありましたが、やがて2羽の雛は親鳥と同じくらいの大きな体まで成長し、巣の上で羽ばたきの練習をするようになりました。その頃にはカラスの攻撃もなく穏やかでした。確か6月下旬だと思いますが、晴天の日、「ピーヒョロロ、ピーヒョロロ」と啼くのでおもてに出て見ると4羽のトビが低空で家の回りを輪を回って飛んでいるではありませんか。思わず「オーツ巣立ったのか、元気でなあ」と声をかけて手を振ると、親鳥は上昇気流に乗り、大空で大きく旋回して子供ら見守ってピーヒョロロ。子供らは翼の操作もおぼつかないかのように、フラフラ飛んでいたのを想い出しました。

石狩川対岸ではトビとオジロワシがあたかも空中戦をしているかのように飛んでいました。自分よりも大きいオジロワシに果敢に接近するトビ、時たま見えるオジロワシの白い尾羽。私には争いではなくダンスかスポーツを楽しんでいるように見えました。鳥もいま子育ての真っ只中、牧



コムクドリ

草を刈ってくれたので、餌も見つけやすいのでしょう。ひっきりなしに飛び交うコムクドリ、カワラヒワ。親鳥の愛情をいっぱい受けて育った幼鳥たちに会えるのがこれからの楽しみです。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、アカハラ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上28種

【参加者】秋山洋子、浅利隆裕・美智子、阿部真美、淡路尚広、今村三枝子、内山英晋、大内和憲、太田敏枝、大橋 晃、川東保憲・知子、木下米子、グロース千鶴子、香内 実、後藤義民、小堀煌治、坂井伍一、佐藤澄子、品川睦生、柴田道彦・久美子、島田芳郎・陽子、高田征男、高正みちえ、高橋きよ子、高橋良直、田中 陽・雅子、戸津高保、長尾保秀・由美子、中村溪子、成澤里美、ニーナ・イレバ、野田貴代子、畑 正輔、原田太郎・恵子、原田幸恵、樋口孝城、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、渡会やよひ

以上46名

【担当幹事】坂井伍一、樋口孝城

野幌森林公園

2012. 7. 15

【記録された鳥】トビ、アオバト、ツツドリ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、イカル、ハシブトガラス

以上22種

【参加者】青山和正、秋山洋子、浅利隆裕・美智子、荒木良一、伊藤信治、井上公雄、大賀 浩、川村宣子、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、坂本孝義、

笹森繁明、佐藤美榮子、品川睦生、柴田道彦・久美子、高田征男、高橋きよ子、辻田捷紀、戸津高保、中正憲佑、成澤里美、ニーナ・イレバ、野田貴代子、畑 正輔、樋口孝城、広木朋子、藤田 潔、辺見敦子、松原寛直・敏子、真

鍋貴洋、丸島道子、村上茂夫、村田睦子、山本康裕、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、渡会やよひ

以上44名

【担当幹事】成澤里美、畑 正輔



【宮島沼】 2012年10月7日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬頃から渡来が

始まり、この時期にピークを迎えます。マガンのほかにも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。小数ですがシギ類も見られることがあります。時には猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見もののひとつです。湖畔から沼を見るだけで移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせをし自由解散となります。天気がよければ駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：午前10時

交 通：中央バス 岩見沢駅前発(月形行)又は

J R石狩月形駅前発(岩見沢行)

大富農協前下車 徒歩10分

【野幌森林公園】

2012年10月14日(日)、11月4日(日)、12月2日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど渡去し、カラ類やキツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：夕鉄バス 新札幌駅前発(文京通西行)

大沢公園入口下車 徒歩5分

J Rバス 新札幌駅前発(文京台循環線)

文京台南町下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】 2012年11月11日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木に止まっているかもしれません。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、

同じ場所で昼食をとることとなります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 午前9時30分

交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

ウトナイ湖下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆昼食、雨具、筆記用具をお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時(土日、祝祭日を除く)

鳥 民 だ よ り

◆夜の探鳥会について◆

6月2日(土)に予定されていた平和の滝探鳥会(夜)は、クマの出没情報があり、また夜間のため安全性を考慮して中止とさせていただきます。加えて、従来利用していた駐車場が今年から夜間閉鎖となったため、来年度以降の実施も難しい状況となっています。このため、幹事会では代替地も含め、検討を進めているところです。

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。価格は1部1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌森林公園探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。

申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915

小堀 011-591-2836

【新しく会員になられた方々】

田中 冬彦(江別市)

山本 康裕(札幌市厚別区)

原田 太郎・恵子(神戸市)

千嶋 淳・夏子・拓洋(中川郡池田町)

種田 昭夫(札幌市北区)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>